マスターズを彩るレジェンドたち(22)

水無月(6月)は長雨の季節。うっとうしい梅雨期は気分が優れないが、マスターズの皆さんはそれぞれの身体運動で、すっきりした気持ちに。コロナ禍はまだまだ収まりそうもないが、各人の“生活習慣”を守り、健康体を維持したい。今月のレジェンドは新居田哲司さん(愛媛)と、北井まどかさん(兵庫)の両スプリンターにスポットを当てた。

写真／新居田哲司さん、北井まどかさん

新居田哲司さん(69歳・愛媛)
自らの目標に向かってマスターズを

愛媛県今治市の新居田哲司さんがマスターズ陸上を始めたのは、1988年の35歳からだった。始めるに当たっての目標は「100mで日本一」、「50歳まで100m11秒台を堅持」、「50歳までに愛媛一」である。

新居田さんは中・高・大学と陸上の経験はない。スポーツは中学生のときにバスケットボールをしていたが、3年間控えだった。たまに試合に出たが「控えだったことで、(試合を)冷静に、そして客観的に見て判断したり、分析したりすることが身に付きいい“財産”になりました」と話す。

松山大(旧・松山商大)を出て社会人となり、ソフトボールを手始めに、現在もレクリエーションバレーボール、ソフトバレーボール、水泳を続けている。このうちソフトボールとレクバレーボールは県内優勝を3回している。

陸上に興味を持ったきっかけは新入社員研修の自衛隊グラウンドで、初めての100ｍを13秒０で走ったこと。その後31歳のときに「愛媛スポレクの100ｍに出てみたら」と勧められた。陸上競技場で初めて走った100ｍは11秒７の５位となった。

新居田さんが目標を立てて陸上のマスターズへ足を踏み入れ、愛媛マスターズのM35・100ｍに出たのが88年９月15日。マスターズでの初レースは12秒０で２位だった。39歳の92年、この年の愛媛マスターズでM35・100ｍに出場し、11秒９で優勝。「50歳までに愛媛一」の目標は果たした。

全日本マスターズ選手権に初めて参加したのは、93年の40歳のとき。M40・100ｍ12秒15、200ｍ25秒00の11位と10位だった。この年の第11回四国マスターズでは、M40・100ｍ11秒８、200ｍ24秒８で２種目で勝っている。

歳月が流れて、2000年に48歳で出場した岩手の第21回全日本マスターズ選手権で、M45・100ｍ12秒07の２位となり、全日本大会で初のメダルを胸に掛けた。200ｍは25秒73で７位に。翌年は和歌山マスターズに参加し、M45・60ｍに７秒55の日本新で１位となった。

これから後は数々の実績を立てているが、今まで最高の思い出になっているのは、50歳で出た03年の第24回全日本マスターズ石川大会。M50・200ｍは25秒71の７位だったが、100ｍで11秒77のトップ。この記録は生涯最高であると同時に、マスターズ入会15年後に果たした「100ｍで日本一」である。

当のレースは４人がゴールに乱れ込む激戦で、これを制したのだから新居田さんの喜びは大変なものだった。この石川大会の翌年、全日本マスターズ鹿児島大会のM50・100ｍに11秒96で１位に。この記録が最後の100ｍ11秒台で、52歳だった。

その翌年の05年は大阪での全日本マスターズで、M50・60ｍに７秒55の同クラスの日本新を出し、100ｍ12秒03と合わせて二冠を達成。60mの日本記録はM45、50に続いて、09年の全日本愛知大会で、３位となったものの７秒59のM55クラスでも樹立した。

世界マスターズの主な大会では、16

19年の３月にトルン(ポーランド)で行われた室内世界マスターズでのM65・60ｍで銅メダルを獲得した新居田さん(先頭)

新居田さんは「健康で長生きして、楽しく、焦らず、無理せず」を信条にマスターズ陸上で結果を残してきた

年の第22回オーストラリア・バースでのM60・４×100ｍＲに49秒11の日本新で優勝を飾った。最年長64歳の新居田さんは２走だった。世界大会で初のメダルを手にしたのは、室内だが19年にポーランド・トルンであった大会のM65・60ｍでは８秒06の日本新で銅メダルをゲットした。

また、17年の韓国・大邱で行われたアジア室内大会のM60・60ｍ８秒12と共に、M60、65クラスの室内日本記録となっている。

「健康で長生きして、楽しく、焦らず、無理せず」を信条に、100ｍで全日本大会５連覇を果たし、12年の台北アジア大会で三冠を達成した新居田さんは、元造船業界の役員だ。これからも自らのモットーを守り、マスターズ陸上を楽しむ。

北井まどかさん（50歳・兵庫）昔取ったきねづかを今楽しむ

昔取ったきねづか。北井まどかさんは兵庫県姫路市に住む４人のお子さんの母だが、姫路商高時代は100ｍの全国チャンピオンだ。

全国の高校生が集うインターハイ。北井さんの旧姓は三木。高２の1989年の第42回高知、次年の宮城両インターハイの100ｍで12秒25（－3.5）、12秒22（－2.4）と全国２連覇を遂げたスプリンターなのだ。高２のときは200ｍも24秒53（－2.4）で２位を占めている。

高校生になる前の山陽中時代は、100ｍのベストが12秒２（手動）、追い風参考では12秒０だった。高校でのベストは100ｍが高２の浜松中日カーニバルで出した11秒77（＋1.1）、200ｍは24秒53といずれも全国高校ランクの上位に。

高校卒業後は中京大へ進み、４年間でインカレの入賞はあるものの、ヒザを痛め、高校時代のような活躍は見せていない。唯一のインカレ優勝は４×100ｍＲ（当時の学生新／46秒15）の１走を務めた２年生の92年、第61回大会のときだけだ。

4人のお子さんを持つ北井さん（下段／中央）。19年の第103回日本選手権マスターズの部に出場し、W45・100mで優勝した

その後は実業団の中京大豊田クラブに３年間ほど籍を置き、この間、100ｍで全日本実業団対抗選手権で入賞を果たした。実業団陸上でスパイクと別れた後は、陸上とは無縁になっていた。その間、結婚をして子宝にも恵まれた。現在は大学生の長男をはじめ、高校生、中学生、小学生の４人のお子さんを育てる。

長い年月を経て北井さんがマスターズ陸上で再びスパイクを足にするようになったのは「友人がマスターズ陸上をやっていたから。若い頃を思い出して」と、日曜日の午前中に加古川市で練習会をしているクラブに入会。会場までは電車が必要だが、週１回は練習会に通っている。

「練習会は男女10数人ですが、結構楽しい」と北井さん。同練習会は同誌５月号で紹介した赤堀弘晃さんが主宰しているBORY TC。北井さんが入会したのは、2016年で44歳のとき。復帰した年に第35回兵庫マスターズ陸上選手権に出てみた。W40・60ｍに８秒00（＋3.1）、100ｍが12秒97（＋1.3）で共に制した。

１年後にはW45クラスとなり、17年の第36回兵庫マスターズではW45・60ｍ８秒21（＋0.7）、100ｍ13秒03（＋0.4）と、200ｍ27秒88（－2.7）で１位の活躍。次の年もW45・60ｍ８秒30（＋2.3）、100ｍ13秒52（－0.7）で勝った。北井さんは兵庫の大会のほかは、足を延ばしていないものの、19年５月の大阪マスターズ（非公認大会）に出てみた。

ここでは初めてといっていいW45・立五段跳を試みて、12ｍ15の同クラス日本記録相当をマークした。さらに100ｍチャンピオンの血が騒いだのが、19年６月に福岡・博多の森競技場で行われた第103回日本選手権マスターズの部のW45・100ｍだ。レースは13秒28（－0.6）で北井さんが１位。「久しぶりに現役時代の感動を覚えました」と瞳を輝かせながら話した。そのレース時の気象条件や、どんな走り方をしたのかなどは、「走ることに集中していたのか、全く覚えていません」と言う。よほど集中度が高かったのだろう。

先に述べたが、北井さんがマスターズへ加入したのは16年、44歳のとき。「果たして走れるのだろうか」という思いから、誕生日前の５月１日に加古川市の陸上記念会で試走をした。この記録会で100ｍを13秒23で走り切り、なんとか自信が持てた。

今年で50歳を迎える。そこで「40歳代の最後に」と、４月30日にあった加古川記録会に参加を予定していた。しかし、思っていた矢先に「右脚のふくらはぎが痛くなって、断念しました」。残念がった北井さんだが「脚が良くなったら、W50クラスでベストを出したい」と張り切っている。